

**会議・イベントにおけるカーボン・オフセット検討会
第一回 議事録**

1. 日時：平成 22 年 7 月 16 日 15:00-17:00

2. 場所：全国都市会館 3F 第二会議室

3. 出席者：(敬称略)

委員 (◎座長)

奥 真美 首都大学東京 都市教養学部 都市政策コース 教授
(欠席)

麴谷 和也 グリーン購入ネットワーク 専務理事・事務局長

穴戸 旦 社団法人 日本広告審査機構 専務理事

篠崎 良夫 カーボン・オフセット推進ネットワーク
カーボン・オフセット推進委員会 委員長

藺田 綾子 株式会社 クレアン 代表取締役

◎新美 育文 明治大学 法学部 教授

信時 正人 横浜市 地球温暖化対策事業本部 本部長

環境省

塚本 愛子 地球環境局 地球温暖化対策課 市場メカニズム室
室長補佐

本田 恵 地球環境局 地球温暖化対策課 市場メカニズム室

オブザーバー

石川 博隆 地球環境局 地球温暖化対策課 国民生活対策室

事務局

加藤 真 社団法人 海外環境協力センター 主席研究員

小野 さやか 社団法人 海外環境協力センター 研究員

4. 議事

- (1) 検討会の設立趣旨について
- (2) 会議・イベントにおけるカーボン・オフセットの現状について
- (3) カーボン・オフセットをはじめとする環境配慮に関する会議・イベントにおける
ガイドライン概要
- (4) 会議・イベントにおけるカーボン・オフセットの論点について

5. 配布資料

- 資料1 会議・イベントにおけるカーボン・オフセット検討会の設置について
- 資料2 会議・イベントにおけるカーボン・オフセットの現状
- 資料3 カーボン・オフセットをはじめとする環境配慮に関する会議・イベント関連ガイドライン概要
- 資料4 会議・イベントにおけるカーボン・オフセットの論点
- 資料5 カーボン・オフセットをはじめとする環境配慮に関する会議・イベント関連ガイドライン一覧

6. 議事概要

環境省挨拶（地球環境局 塚本室長補佐）

ご多忙中のご出席にお礼申し上げます。イベントにおけるカーボン・オフセットは重要な地球温暖化対策の一つとして位置付けられている。普及啓発を目的としカーボン・オフセットフォーラムのような相談支援窓口も用意がなされている。国内の排出権でイベントにおけるオフセットの取組をどうしたらいいか、という事を実に多くの方々から相談を受けていた。このような経緯もあり本検討会を開くこととなった。本検討会を通してイベントにおけるカーボン・オフセットの取組を発展させていきたいと思っているので、委員の皆様より議論を頂きご指導願いたい。

議事(1) 検討会の設立趣旨について

（環境省より資料1について説明。その後質疑）

新美座長：それではただいまの説明について、質問等あれば発言を願いたい。

藺田委員：カーボン・オフセットのイベントだが、環境省でも既に実施されているものがあるかと思う。今まで実施してきたイベントに関して状況を共有したい。

環境省：今まで実施してきたものを整理していなくて恐縮だが、今回のような会議にもオフセットをしようと考えている。会議においてオフセットをしようとする機運は環境省内で高まっている。

篠崎委員：昨日の発表で、横浜市がAPECでオフセットをするという報道があった。その実施方法に関して情報を共有したい。

信時委員：APEC全体でいうと、海外から要人のフライト等で数万トンにも上る。横浜市で一昨年行ったTICADは数万トンペースになった。APECもそうだが、全てをオフセットというのは、なかなか我々自治体ベースでは難しいと思う。今回は横浜市のホテルと会場（パシフィコ横浜）で使われる電気・ガス・水道を算定・オフセットしたいと言う事で710トンの想定にしている。そこであえてオフセットスポンサーを募らず、市民に参加していただくことを一番の目的としている。環境絵日

記と、横浜市の水道局が発売した「はまっどうし」という 500ml のペットボトルを話題として広く人を集めていこうと考えている。

麴谷委員：会議にも、国際会議から規模の小さいものまで、イベントも屋内・屋外と規模間も考えて色々な種類・分野があると思う。これを全て網羅して検討しようとしているのか確認したい。

環境省：限定するということではなく、会議・イベントも様々であるが、それに応じて大きなくり方で行いたいと思う。多くの方々に取り組んでいただきたいと考えている。

中央委員：こういうオフセットを行った場合、確実に実施されている事を示すオーソライズが必要になると思うが、その方向性はどのようなものなのか？

環境省：気候変動対策認証センター（4CJ）の方で運営している第三者認証、理想形はそこに行きつくと思う。

麴谷委員：グリーン購入法の前文にカーボン・オフセットとカーボン・フットプリントが入ったが、その関係性・関連性は何か考えているか？

環境省：今年ようやくグリーン購入法における調達物の参考として前分にカーボン・オフセットがとりあげられた。今後もグリーン購入法に対し検討を進めていきたい。

新美座長：今から予告しているが、第 4 回検討会を 11 月か 12 月に行う。これを時間的なゴールとして念頭においてもらいたい。この中で議論が沸騰して 4 回ではとても足りないという事であれば、1 回程度増やす可能性もある。

議事(2) 会議・イベントにおけるカーボン・オフセットの現状について

(事務局より資料 2 について説明)

新美座長：ただいまの説明で質問があれば。篠崎委員。

篠崎委員：オフセットというと、枕言葉に「信頼性構築を立てる」とつくが、信頼性構築という言葉がつくこと自体信頼されていないことが多く存在するという事である。関わる全員がその危惧をもっているのではないか。その中で、既にこれだけのイベントが行われているとなると、この中で、信頼性について危惧があるものもあると思う。普及活動は当然として、可能な限り、具体的で分かりやすいルールを作っていくという事が必要ではないか。

信時委員：カーボン・オフセットの効果もあるが、イベントに的を当てているということは、イベントそのものが楽しいオフセットのありかたというか、そういう所の効果を最大にするようなルール作りは大切かと思う。そういう意味では、まだ少ないとは言え、やる気のある主催者も、事例自体も増えていると思うので、そういう事例を分かりやすく定型化しながら見せていくといった事も、推進のためには必要ではないかと思う。

宍戸委員：イベント主催者側の立場に立つと、イベントというのは上手くできて当たり前の世界である。失敗が許されるイベントは大方存在しない。そうになると、非常に多くの要因が浮上してくる。屋外型であれば、天候によって全く事情が変わる。長野オリンピックでの話になるが、1月まで雪が全く降っていなかった。そうすると、自衛隊のトラックで雪を運んでくる事になる。これは非常に大きいエネルギーだ。これが本当にカーボン・オフセットにつながるのか。逆に言うと、やらなくてはいけないという宿命のみが存在している。雨が降ろうが、槍が降ろうが主催者側はイベントを踏破しなければならない。屋外と、屋内と分けて考えなくてはイベントとしては難しいと感じている。もう一つは、事業者と参加者が WINWIN の関係となり、事業者側が「やってよかった」と感じることができると、思う。参加者を集めるという目的に対して、削減努力やオフセットの考え方が経費節減に貢献できるなど、企業にとってプラスになる事だと思う。CSR 的にプラスになるということも当然あると思うが、企業は利益をださなくてはいけないので、そういった部分で、いかに意識を変えていくかを考えながらやるべきではないかと思う。

藪田委員：今まで行われているイベントは、主催者も環境問題意識も異なっており、カーボン・オフセットイベントであることだけが共通項であった。コスト削減や今回の横浜市のイベントは参画のしかたを考慮されていると感じる。1 kg のクレジットを付与した水と、1 kg のクレジットを付与した環境絵日記、合計で 710 トン、このような仕組みで行うのも感心したが、このような「仕組み」を含めたベストプラクティスが今後必要になってくる。こういう形でオフセットした、というだけでなく市民、あるいは参加者への啓発に対する必要性を感じる。環境問題に全般的に見られる、苦しくて辛いという事ではなく、関わり全員が有意義な気持ちに感じるようになれば、シェアの広がりにつながっていくと考える。

篠崎委員：カーボン・オフセット推進ネットワークのホームページには、会員企業の色々な事例が、環境省の分類にそって載っている。ある程度の情報は網羅できるようになっているので、参考までに。

麴谷委員：非常に基本的な話に立ち返るが、カーボン・オフセットの基本的な考え方として、原点に削減努力があると思う。その考え方をこの会議・イベントに当てはめた時に、どこまでの削減努力を認められるか熟慮する必要がある。その基準がばらつくと信頼性も損なわれる。

宍戸委員：バウンダリの設定の仕方に論点がある。大・中・小、屋内・屋外のマトリックスの中で、どういうバウンダリを設定するか基準があると、参加者も適応しやすいと思う。全体の基準が一緒だと適応しにくい。もう少し細かい基準が必要ではないか。

藪田委員：先ほどの資料で会議・イベントの市場規模が 43,200 件で、カーボン・オフセッ

トが全体の0.3%である、という説明があった。この数字をどの程度まであげていくか、目標値はあるか。企業に、環境活動・CSR活動をまわす事を提案している。例えば2020年に何%に増やしていくという目標値はないか、これは要望になるが。

環境省：割合の話というよりは、件数に関する議論が多い。今後どういう数字で設定するかということも含め、もう少し時間を要すると考える。

新美座長：市場規模というものは、社会がどれくらい関心を持っているかにかかっていると思う。事業者にとっては排出量取引が関心の的となるし、一般人には、オフセットがひとつの目玉になると思う。それに合わせて、普及活動を行うためには一定の目標をたてないと活動できない。その辺りで意見があれば。

篠崎委員：今の意見と同様、数年後に一般消費者の、オフセットや排出量への認識が一気に高まると考えている。当たり前のものになっていく。いま実行している我々が不確実な方法を使っていると、いずれは全体の信頼性を欠く事になる。そこを一番危惧している。そのようなことがないように、いかに信頼性を高めるかを考えなければならない。

麴谷委員：2点あり、「会議・イベントにおけるカーボン・オフセットの現状」で、国内の事例が挙げられているが、国際的に共有すべき取組事例があるのか。また、もう1点として、今年の1月14日に環境省でチャレンジ25がキックオフされている。国民に対して取組を呼び掛けている内容だと思うが、そういう動きとの連携を考えているか。

事務局：1点目について、国内の取組の事例の他にも国際的な取組についても把握しているかということについて、この点に関しては次回以降に具体的な事例を報告する機会を持ちたいと思うが、国際的な事例についても事務局として調査を進めている。少し紹介すると、先ほど洞爺湖サミットの話があったが、それに遡ること3年前にイギリス・スコットランドサミットにて行われた取組は、世界的にカーボン・オフセットを知らしめる大きなものであった。国連気候変動枠組条約締約国会議ではCOP9においてもカーボン・オフセットが行われた。各国でカーボン・オフセットは進んでいるが、現状最もアジアで注目されているのは、中国の万国博覧会である。また、直近ではオリンピックやワールドカップなど、スポーツイベントも非常に一般的であるし、参加型の取組として発信力の高いカーボン・オフセットが実施されている。

環境省：2点目に関して。チャレンジ25だが、国民運動という事で連携してやっていきたいと思っているところである。

篠崎委員：先ほどの話と関連してくるが、ルール作りと口で言うのは簡単だが、算出方法を本当に決められるかを危惧している。東京から大阪まで飛行機に乗った場合、民間のプロバイダーの結果にばらつきがある。下と上で排出量に3倍以上の開きがあり、これで信頼性を確保できるのか疑問がある。

環境省：排出量をどのように算定するかについては、機種が開示している情報に基づく。バウンダリの取り方としては、この機種であればここを算定の要因にする、など整理したいと思う。

新美座長：非常に重要なポイントだと思う。そこはぜひ明確なものを願う。

宍戸委員：将来的な課題だと思うが、バウンダリの計算も参加人数、使用電力を記入すれば、オフセット量が算出されるような簡単な仕組みが整えば更に普及するのではないか。

新美座長：会議は形式化しやすいが、イベントは多岐にわたるので、困難だと思う。その辺りも見極めながら、定型化できるものはその方向で考えていきたい。

信時委員：国際会議やスポーツイベントは目立つので、すでに話題になっているが、一般のイベントや会議でも、オフセットという行為が当たり前の社会になると思うし、そのように横浜市民に考えてもらいたい。負担というだけでなく、生活様式になることが今の横浜市の方針でもある。非常に簡単な例だが、退職送別会の際に、コンビニエンスストアでカーボン・オフセット証書を2t程購入し、送別会をオフセットした。参加者からもそれだけの協力を得られた。バウンダリ等は考慮に入れなくても、このような取組が全国で行われたら相当な量になる。このような取組を一つの事例として掲載するのも一つの方法かもしれない。そこも視野に入れて考えたい。

新美座長：非常に面白い取組だ。事業者が行うオフセットであれば、バウンダリについて注意深く取り組む必要があるが、市民が身の回りの事についてオフセットする時にはもう少し寛容なものがあってもいいと思う。先ほどイベントに大中小があるかもしれないという話に対し、一つの応用のパターンのようなものがあってもいいと思う。他に意見がなければ次の議題に移りたい。

議事(3) カーボン・オフセットをはじめとする環境配慮に関する会議・イベントにおけるガイドライン概要

(事務局より資料3について説明、参考として資料5を適宜説明)

新美座長：ガイドライン類に関する現状説明について。何か質問等あれば。

麴谷委員：要望になるが、各種規定類について非常に難解に感じた。オフセット全般ではなく、会議・イベントという領域に絞った事もあるので、どのような分類にするかにもよるが、可能な限り理解しやすいという点を考慮して欲しい。合わせて、事例を対外的にアピールしていく事が、カーボン・オフセットの普及につながると思う。容易・理解しやすさへの配慮が必要ではないか。

藪田委員：実際各種規定類を全部読みこむのは大変だと思う。例えば、「カーボン・オフセットに関する検討会」に対する質問・相談窓口を、普及されるまで1年間環境省

に設置する。実施者が正確な知識を身につけなければ次の段階に進めないと思う。精度の高いものを普及していきたい場合、ラベルの認証基準を整えるより、総合窓口としての人材を設ける事も必要ではないか。

宍戸委員：私はカーボン・オフセット認証委員会の委員も務めている。認証委員会では、1回3件程度の案件が提出され、1案件に対して、2時間前後、7、8人の委員で討議を行う。法律家や弁護士も参加している。私は広告表示を主に確認しているが、バウンダリの計算方法については様々な議論がなされている。初期の段階のため、多様な議論の中から適したものが現われてくると思うが、先ほどから議論されているように、可能な限り簡素化されるならば、非常に便利で使用しやすくなると思う。

篠崎委員：可能な限り理解しやすくしたい。このガイドライン類が難解な理由は、表現が抽象的で、解釈が困難であること。オフセットにも様々あり、「特定者間完結型カーボン・オフセットの取組に係る信頼性構築のためのガイドライン（Ver.1.0）」が取り組まれたことにより、以前よりは理解しやすくなったと感じるが、まだ解釈が難しい部分もある。今回の検討会を取りまとめる際、理解しやすくする為には、良・不良を定かにし、可能な限り具体的な事例を示していく。オフセットは視覚に入るものではない。そのようなものを判断するには、良・不良を定かにする必要はあるが、一般消費者にすぐに理解してもらうのは難しいと思う。しかし、少なくとも実施者には、ある程度理解できるようにしなくては行けない。理解しやすくする事は不可欠であるし、理解しやすくする為の活動が必要だと思う。

信時委員：基準や数値のあり方は必須なものだ。そういう意味では、法律化されるまでに何段階もあるという事だ。オフセットを普及するという意味では市民が分かるようにしたい。ジャンルは違うが、例として横浜市には環境家計簿というものがある。これについて市民から何千件もアクションがある。その中に横浜市作成のフォームが分かりにくいという意見があった。様々な情報を記載しすぎて、逆に伝えたい事が見えにくくなりがちだ。しかし、意欲のある市民は自ら解釈して、的を射た提案を行う。今後フォームや内容に対して、意見を受け入れていく、という事を検討してはどうか。

新美座長：貴重な意見だと思う。法律というものは、内容の漏れを防ぐため、様々な想定を行い、例外的な事例も加味しているため難解になる。実現時期は別として、これの骨格だけ示した形で使用できるようにし、不明な点は専門家に相談可能なシステムを構築したい。これは現状認識と課題である。

議事(4) 会議・イベントにおけるカーボン・オフセットの論点

(事務局より資料4について説明)

新美座長：質疑応答について、事務局から次回以降の議論の論点の確認もあったので、他に論点があればお願いしたい。

穴戸委員：イベント関連でも、パーティーの組立や、会議を設定する会社など、多様な業界がある。業界単位でオフセットに関してどう捉えているか、ヒヤリング等により認識する必要があるのではないかと。

新美座長：他の分野で行ったデータを応用できるのではないかと。商品の発送やビジネスレターの例なども参考になるかもしれない。

藺田委員：データベースの蓄積ということだが、イベントとなると多種多様なパターンがあり、定型をつくるのは難しいと思うが、例えば登録制度のようなものを作成し自分たちが行うイベントに一番近い形で行われたイベントが、いかなるもので、どの程度オフセットしているかというデータをインターネットで検索できるようにする。実際にイベントを実行しなくても、イメージが出来、興味がわくのではないかと。

篠崎委員：データまで全て網羅すると時間がかかりすぎる。場合によっては、どのデータがどこにある、という情報は提供できるかもしれない。電子データというと詳細なものを期待するが、これは今の段階では必須ではない。マニュアルには入れず情報を提供する程度になると思う。ただ、この場で構築していくのはどのレベルまでなのか、ある程度次回までに考える必要がある。

麴谷委員：2点ある。まず1点目は普及を促進する場合、事例をいつでも誰でもどこでも閲覧可能な形で掲載するのは非常に重要だと思う。しかし、それを需要につなげるには、ブランディングの要素を加え、価値が上がるという判断が必要だ。そこまですべてを具体的にだすには、場を設けて表彰するなど、スポットを当てる、モチベーションを高める、技術を広めていくという事を考える必要がある。もう1点は、オフセットを実行するのに、21世紀の大きなテーマである化石燃料から再生可能なエネルギーへのシフト、という事から始めていく。生物多様性と多様なクレジット使用可能にすることで、再生可能なエネルギーの量を増やすという意味があるという事を伝えられれば普及促進につながるのではないかと。

信時委員：手続きや普及の話題があったが、やはり人材が大切だと思う。カーボン・オフセットはイベントの重要な一部だという認識が必要。APECのオフセットにしても、横浜ならではのバウンダリということで、横浜のホテルとパシフィコ横浜と決めている。横浜で行っている事をPRしたい。また、オフセット先についても、APEC参加国のクレジットで行う事が重要な意味を持つと思う。オフセットはイベントの重要な演出の一部である、という位置づけになればイベントとオフセットを一

緒にするコーディネータ的な役割の人材が必要だと思う。イベントオフセットがごく普通のことになれば、オフセットの中身を理解し、イベントにも詳しく、いかにすれば効果的にイベントに配置できるか、総合的に考える事が、人材育成を含め必要だと思う。

宍戸委員：イベント管理士という資格がある。そういうものに環境を加えるというのも一つの方法かもしれない。

篠崎委員：イベントでオフセットした、と一方的に伝えるだけではなく、参加者がいかに積極的に参加できるか、というのが必要だと思う。参加した人も喜べるようなものを考えていかなければならない。

藺田委員：先ほど藺谷委員の意見にもあったが、CSR 報告書は、現在約 1160 社から公表されている。そのようなものが注目されていくと、モチベーションが上がっていくと思う。時代も市民参画型になってきているので、アワードの中から投票出来る仕組みも含め考えたい。

藺谷委員：先ほどの資料の中に、会議・イベントの市場規模の金額と件数が記載されていたかと思う。それをオフセットすると、どのくらいの規模になるか、シミュレーションで構わないので、示せないか。規模が明確に見えたと、実施者の意欲にもつながると思う。年間平均でどの程度会議・イベントが開催され、どれだけの CO2 を排出される、そうするとオフセットするのにどの位かかる、というシミュレーションも示していただければ参考になると思う。

新美座長：データがあればぜひ出してもらいたいが、限界があるかもしれない。しかし、効果を明確にする事は非常に大切だと思う。

新美座長：以上議論が一通り出たということもあり本日の検討会はこれで終了にする。初回から白熱した議論を感謝する。芯をとらえた議論が展開できたと思うので、次回以降さらに深い議論が行えると思う。次回も宜しくお願いしたい。

環境省：本日は委員の方々に綿密な審議に感謝したい。今後の検討過程について、重要な意見もあげられた。これらは事務局で精査したい。本日の議題にあがった項目については、なるべく適正な形で次回に整理する。今後ともご協力をお願いしたい。

以上